三月作品

――☆今月の四人☆（小島ゆかり選）――

時を失ふ

森　重　香代子　山口

卓上を洋盃（コップ）の翳の移りゆきいたくしづかに時を失ふ
握りゐし万年筆のほの温し区切りをつけて机を立ちぬ
家にても毛皮の小さき衿巻をしてゐるわれよ老い深みたり
人込みにふと行き会ひし老びとに面影のあり泪ぐましも
此の屋下ひとりの婆の棲みをりと空ゆく鳥の噂しをらむ

恋の手紙

島田　暉　神奈川

赤柿にナイフの刃先入れながら人の無情を生き長らへる
銀杏の古木の中に水流れいつも優しく慰めくるる
命とは強きものなり落葉せし幹の中ゆく水流はげし
わが胸はしづかな沃野手や足に赤バラ咲かせダリヤを咲かせ
年寄りて恋の手紙を書くときはバラのかをりのする便箋に

月集スバル

ダリヤ園

橘　芳　圀　新潟

ダリヤとはダリアの古き呼称にて羽前小松にダリヤ園あり
ダリヤ園かたへに宿り夕光と朝光を置くダリヤを見たり
球根の病気にそなへダリヤ園ある町戸々にダリヤを育つ
三度来し川西ダリヤ園その花を愛せし母をともなはざりき
二十にて京より越に嫁ぎきし母愛したりダリヤの花を

不文律

原賀　瓔　子　東京

ばらばらになるまで読んだ文庫本を買ひかへたくも品切れといふ
息子には「あのう…」でピンと判るらしおふくろわれのアマゾン頼みが
（一応はわれにも不文律ありて、できないことだけ子供に頼む）
アマゾンの仕事は速い二日後にもう届きたりわが欲しき本
病院の待ちの時間も苦にならず三十年読む文庫をひらく

――☆――☆――

水島晴子　兵庫

サルビアの緋の花群るる一区画冬至まぢかの午後の日を受く
新幹線車窓にちかき茶のはたけ見納めだとも知らずながめき
ふくやかなマリアの胸にいだかれて母を見上ぐるみどり児イエス
聖母子を戴せゆく驢馬の手綱とるヨセフの視線はるかをのぞむ
怖れるな齢を生きよ花籠の薔薇がささやくきみの賜もの

高野公彦　千葉

東夷、西戎、北狄、南蛮と四囲の国を蔑して呼びしその国、中華
中国に感謝すべしよその国の文字を用ゐて暮らす我らは
漢字から仮名文字創り活かしたる大和の民の末裔われは
中国に無き文字「峠、辻、俤」見つつわが裡に広がる日本
ひとり飲む水やさしもよ歌を詠み独酌ののち目覚めし夜ふけ

奥村晃作＊　東京

タクシーの運転手さんも例外なくマスクしてますコロナ健在
連結を解かれし貨車が走りつつとどまるまでを見ていたりけり
ウクライナの希望の星の安青錦「自分の相撲を取り切るのみ」と
ダーニャこと安青錦新大まちがいなく〈強い大関の相撲取るべし〉
パレスチナ、ガザ地区の戦闘本当に止むであろうか止むを祈るのみ

影山一男　千葉

老人性血管腫とぞ湿疹も一丁前に老いを告げをり
ｐａｙｐａｙもＳＮＳも使ふなく愉しきかなや世に遅れ生く
東京湾朝凪の面に冬陽さし金のきらめき未来のごとし
浅草の羽子板市にあがなひし藤娘もう飾ることなし
妻七十娘四十を過ぎたれば遥けくとほし羽子板市も

桑原正紀　東京

迢空のうた解きなづみ手につかむ蜜柑つめたし真夜の灯の下
迢空は〈まれびと〉でありかつ〈神〉なりきかく捉ふれば解れゆくもの
ふかきふかき寂寥相と慈愛心ともどもに持つは〈神〉なればこそ
同質のもの持つゆゑに迢空は柊二を深く愛したるにや
この世なる六十七年を終へしとき魂は還りけむ常世のくにへ

狩野一男　東京

みちのくのみちのとほくの奥処より一点鐘のごとく熊鈴
山茶花がもう咲くだらう十二月寒くて暑くて埒も無ェ月
京王線井の頭線乗り継いで三十一年通ひたりけり
中の橋バス停に咲く寒椿白いの、赤いの、我が味方なり
我は行く　完全無欠無名なる老法学士にて、われはゆく

宮里信輝　神奈川

鳥居原庭園入口両側に立てり高木メタセコイアが
左折して少し歩けばひらけるも遠くに「大山」下方に「宮ケ瀬湖」
階段を下方へと降りておどろけり真赤に咲けるドウダンツツジ
真赤なるドウダンツツジのその赤さハンパではない真赤赤赤
木や草のいのちの色よ「鳥居原湖畔庭園」めぐりてたたふ

小島　ゆかり　東京

冬空のコバルトブルー撃たれたる熊の胃の中からつぽなりき
あたまから人も落葉(らくえふ)するやうな街に献血車が来てをり
後ろ姿いまもうつくし二十年生きつつ猫に雑用あらず
みづからを羽交(はが)にねむるこの夜はからだのなかに渡り鳥くる
しんきらりさびしい鬼はゐなくなり　けむりのやうなシンギュラリティ

木畑紀子　京都

権力を摑み取りたる者の笑みテレビに見ては身震ひをせり
つじつまのあはぬ言葉のひとつにて戦略的互恵関係とはいかに
身めぐりの悲にまさる悲の歌を読み朱筆の止まる通信添削
吹き寄せて来るかなしみを掬ふごと霜月後半おちば掃き忙し
ひひらぎはアドベントの花硝煙を消して世界に香れひひらぎ

大松達知＊　東京

納豆に麻辣醤をまぜてゆくそしてすべてがわれに入りゆく
ひと晩を豆腐立たせてしずしずとまたしんみりと水を抜くと言う
肉声に肉はなけれど風のようにほんと?(チンチャ)よく言うとなりの娘
わが酒量われは知りつつ知りながら超えてゆく夜の今のいとおし
食い終わるために食いたるひときれの素揚げの茄子のかなしかりけり

田宮朋子　新潟

山みちのもみぢ夕日にかがやけど谷の底ひの翳りはふかし
大公孫樹身ぶるひしつつ金いろの万葉の箔降らせつづける
寒菊の下葉は紅くもみぢして狭き庭にも絶景はあり
あかつきの庭の落葉はことごとく白銀細工の霜化粧せり
襲ひくる白きドットを全力で拭ひつづけるワイパー二本

津金規雄　神奈川

一葉のかすかなる揺れ寄り合ひてやがて一樹の奏楽となる
トンネル内半円の視野にもみぢして大仏坂のかがやきは見ゆ
遮断機の上がるや少女ママチャリを発進させたり零下のあした
老若も男女も問はずにスニーカー師走夜更けの小田急車内
病臥のこと知らされぬまま訃は来たる熱き出逢ひの若き日ありしに

小山富紀子　京都

母さんもお前と同じ毛色かね保護犬あみに時折問ひき
ためらひはあれどやつぱり熊さんもツリーに吊しメリークリスマス
街路樹の落葉を掃けといふごとく郵便受けにボランティア袋が
極月の朝のひかりに掌をひろげ生命線に日光浴さす
間違ひともう言へないの決めたから天を離れて地へ消ゆる雪

清水正子　神奈川

意識なく眠りつづけて終の日に羽撃きゆけり柊二のもとへ
「コスモス」を愛し仲間を大切にしたる武田氏が逝つてしまひぬ
六十はまだひよつこと揶揄せしよセンテナリアンを目指す武田氏
根掘り葉掘り聞けばよかつた「コスモス」の金銀砂子こぼれ話を
亡き人に会へるだらうか松江には黄泉比良坂ツアーがあれど

福士りか　青森

「きょうもまたいいことばかりがあった日」とあなたが言へば間違ひはない
点滴のスタンドに星のオーナメントつけて毎夜があなたの聖夜
病院は天使の住みか昼も夜も呼べば白衣をひるがへし来る、と
ひひらぎの模様を編み込むニット帽二〇三号室のユニフォームなり
父さんは泣くだらうなとポツリ言ふ　エリ、エリ、レマ、サバクタニ

藤野早苗　福岡

火の玉のやうな怒りを嚥下して　棘皮動物水槽のまへ

老い猫に朝夕シリンジもて飲ます1ミリリットルの水薬二種

この街は女のドラマがよく似合ふハマのメリーと港のヨーコ

熱湯を注いで三分　ウルトラマンが地球のために死力を尽くす

しあはせも他力本願好物のおでんも作れぬ夫の残生

風間博夫　千葉

上達をするには月二ではダメで週二週三指導員いふ

伸びてきた髭を剃りたり生きてゐるあかしの髭を、さつぱりとせり

二階から見たり車のワイパーの（動かず、動かず…動く）小雨だ

マイナンバーカード更新十年ごと顔が老けゆく十年毎に

客われはあまたのひとり店員もひとりあまたの客に応じる

田宮朋子歌集　令和7年9月刊　二六〇〇円（税別）　送料三〇〇円

光に濡れる　コスモス叢書第1260篇　角川書店

著者住所　〒940－2056　新潟県長岡市王番田町二一八〇―一

桑原正紀著書二冊

ようこそ、歌の世界へ　歌書　コスモス叢書第1261篇　本阿弥書店

令和7年9月刊　一七〇〇円（税別）　送料三〇〇円

麦熟るるころ　第十歌集　コスモス叢書第1270篇　本阿弥書店

令和7年11月刊　二七〇〇円（税別）　送料三〇〇円

著者住所　〒173－0037　東京都板橋区小茂根三―九―八―一〇六

奥村晃作歌集　令和7年9月刊　二五〇〇円（税別）　送料三〇〇円

天啓　コスモス叢書第1262篇　短歌研究社

著者住所　〒175－0092　東京都板橋区赤塚七―一五―一六

島田暉歌集　令和7年10月刊　二六〇〇円（税別）　送料三〇〇円

昭和の鴉　コスモス叢書第1259篇　角川書店

著者住所　〒246－0015　神奈川県横浜市瀬谷区本郷一―一四―六

小島なお歌集　令和7年12月刊　二〇〇〇円（税別）　送料三〇〇円

卵（らん）降る　コスモス叢書第1263篇　左右社

連絡先　〒151－0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷三―五五―一二　ヴィラパルテノンB1　左右社

田中愛子　埼玉

ときをりを視野おぼろなるひだり目は冬ほうたるの棲むと思へり
どの国のリズムとも知れぬひびきありＭＲＩのトンネルのなか
眼球をうごかさずゐること難し検査受けゐる三十分間
疲れたるからだは川辺ゆくやうに待合室へゆらら戻れり
ゆるやかな冬のゆふぐれお鍋にはきのふのおでんまだ残つてる

水上比呂美　東京

冬びよりむすめ家族の住む部屋はたたなはる坂の途中にありぬ
をさなごは目覚めたころか両の手で眠いまなこをくしゆくしゆこすり
保育園に〈送る〉といふより〈運んでく〉14キロの娘の坊や
をさなごの二足目の靴きつくなり園庭の奥の落ち葉の小径
裕次郎みたいな横目でのぞくから坊やにみかんもひとつあげよ

鈴木竹志　愛知

夏疲れやうやく去りて思ひ立つ師走の街の隈々巡るを
繊維街なりし昔の面影をいまだとどめる長者町通り
安売りの店をのぞけばワイシャツの値は「５００円」一瞬まよふ
長者町通りを越せば若き日より長く通へる短歌会館に
春日井建、岡井隆にまみえしもここ名古屋市短歌会館

水上芙季　神奈川

自由だと錯覚をして渋谷ストリーム十一階のスタバラウンジ
上から見ると変はつてないね、と歳末の渋谷の街を見下ろしてゐる
「サンタさんに何がほしいの？」「プレゼント！」「中身は？」と聞くわれ「入つてる！」と言ふ子
「ジングルメー、ジングルメー」と二歳児が鼻ふくらませうたふ十二月
〈親世代〉はもう死語でせう同級生の子が二十歳となる令和八年

大野英子　福岡

ゆふやけの色の河口が濃藍に染まるまで見つ何思ふなく
河口より離れゆくほど雑多なる街のあかりを川面は映す
ゆふどきの北風強くわれを打つごとくナンキンハゼの葉散らす
一夜にて葉を落としたるあふちの木まだあをき実があをぞらに映ゆ
乾きたる落葉をざくざく踏んでゆく何か楽しき遊戯のやうに

松尾祥子　東京

金木犀香りつつ散る花びらの木々の根方の豊かなる円
時を重ね重ねし時より解かれたり母の頭に今しかなくて
子に孫に曽孫に老いてゆく日々をまつぶさに見すははそはの母
ツリー囲みプレゼント孫に母に置く子らに置きたる日々思ひつつ
あまたなる実をつけ撓ふ金柑の枝を照らせり初日の光

鈴木千登世　山口

墓のこと古家のこと片付くるものらの低き声がぞよめく
書架の本二重を超えて横に積みもう入らねば平積みとなる
片付くるものと定めて心ふたぎ文学全集十字に縛る
背の文字を読めば開けたくなる本を開けてしまつて戻す定位置
日に焼けて黄ばむページに積もる〈時〉等しき〈時〉が髪に積みたり

小島なお＊　東京

秋廊下のこちらから見る玄関に和菓子のような妹の靴
霧雨の能楽堂へ六条御息所の亡霊を見に
麩を椀に崩しゆく箸をあやつる手、見尽くしてより冬に到れる
包まれて掌にまた還りくる桜花のように咲く追憶
降りやまぬ花びらは菓子　てのひらを器のように掲げて待った

蒼天にするどく百舌の声ひびき銀にほふごとき陽のいろ　小田部　雅子　静岡

冬の雨ほのあたたかく降りつづき新聞の束にほふゆふぐれ

冬晴れの薔薇植ゑかへし棘の傷一滴の血に鉄さびにほふ

木枯らしに鵯が蜜吸ふ侘助のうすべにほろり落ちて香れり

書棚まで朝日さしきてパン焼ける香りに明ける駿河日々

風よ来い　われの心に草原の緑を揺らすその一途さで　斉藤　梢　宮城

〈懸命〉は役には立たず〈恩情〉も役には立たず　雲が燃えてる

頭蓋の力強さに驚きて骨を拾つた父の白い骨

生まれてから十七回も居を移しおそらくここが最後の間取り

竹山の撥の独奏ききをればわれの詠み来し歌も独詠

うたを味わう―食べ物の歌 ◉高野公彦

葱きざみけり　―厨歌の草創期―

いそがしくふところかゞみふところに
をさめてまたも葱きざみけり
岡本かの子『愛のなやみ』

「厨にてうたへる」という一連の最初の歌で、大正五年(作者二十七歳)ごろの作。

作者は二十歳のとき岡本一平と結婚し、男子(太郎)を産んだが、その前後から男性遍歴が始まった。この時期をみずから「魔の時代」と呼んだが、ときには主婦業もこなしていたことが右の歌から知られる。

葱をきざむと、涙が出る。すると作者はふところから鏡を取り出して化粧の崩れを直してまた葱をきざむ。普通の主婦ならそこまで顔を気にしないだろうが、きちんと化粧していないと気がすまないのが岡本かの子らしいところと言えよう。一連にはほかに次のような歌が並んでいる。

じゃがいもの真白き肌に我指の傷の血
しほの少しにじむも
指の傷巻きつゝあればたそがれの厨の
隅にこほろぎのなく
白菜を洗ふ我手の一すぢの指輪しら
〳〵光る朝かな
過まちて指にあてたる鉋丁の薄刃つめ
たき厨の夕
やゝ荒れしわが手いとしや君がため飯
煮るわざもふたつきあまり
あやまちて我落したる金簪の細く澄み
たる朝の水瓶

「ふたつきあまり」とあるから、継続的に厨仕事をこなしていたのだろう。不慣れな仕事に悪戦苦闘している様子が伝わってきて、親しみを覚える一連である。これは、いわゆる「厨歌」としてはかなり古い作例であろう。与謝野晶子には厨歌はきわめて稀である。

(『うたを味わう』より再録)